

夜學があつた。

ランプが灯つてゐる。

村のまだ検査まへの狂人が、宿直室の窓の下に立つて、薄氣味悪るく覗く。

尾上は衛生カバリーの專賣特許を得る事に腐心してゐた。

「君は僕が狂人になつた事を知らないのかね、國の方から誰も知らして寄せさなかつたか」

新吉は尾上に言つた。

變な笑ひ方をして村の狂人は、窓の障子を引き破つたり、ガタガタさせたりした。

傍に正氣の青年が居て、村の狂人を叱り付ける。

夜學が初まると新吉は、田舎の青年の幸福であるべき事や、伊豫節を淫猥な合ひの手を入れて、

歌つたりした。

衛生カバリーは膳の上にかぶせて、食べ物に蠅や埃りがとまらない様にする考案だつた。

新吉は興奮してゐた。

俺は弘法大師ではない『興奮大師』だと、東京の市内電車の中でも言つたものだ。